第八章．外交政策，では，この地域をとりまく国際政治的環境がダイナミックに論じられている。

本書は，このように，東南アジア政治の問題点をほぼ網羅している。叙述は平易明快だが，含みの多い文章が並んでおり，実質的密度は高い。読者には，従って，慎重な読み方が要求されよう。少くとも読者は，将来の歴史に鋭い洞察を加えるべく著者が本書全体に働かせている一種の歴史的な読みの意識を感じとらねばならない（ちなみに著者は，南ヴェトナムの将来については，一．軍部支配，二．ゴ・ジン・ジェム政権の継続，三．一旦民主化したあと共産化，という三つの可能性を見ており，インドネシアの将来については，陸軍の支配を暗示しているようだ）。

本書を貫く結論的主張は，すぐれたリーダーシップが必要だ，という平凡な主張のようだが，著者の要求するのは，政治指導が民主主義的であれということではなく，「自国を共産主義もしくは解体から救い，自国の地位を高めうるような」政治指導の存続である。一見寛容なようだが，これは，東南アジア政治の現実にとっては，かなり厳しい要求である感じだ。平凡な結論だが含蓄は大きく，いろいろ考えさせられる。

巻末の selected bibliography には，最少限度の基本的文献が精選されており，東南アジア政治に関する必読書を知る上で役に立とう。とにかく，一級の入門書である。

なお，本書には，邦訳がある（鹿島守之助訳「東南アジアの今日明日」鹿島研究所出版会300円）。このようなすぐれた基本書が訳されたこと自体は喜ばしいが，遺憾ながら，日本訳は，ひどく拙劣で推薦できない。政治学用語の訳出や個有名詞の表記法もいい加減だが，なによりも，誤訳が多過ぎる。第三章はとくにひどい。一，二指摘すると，たとえば，"He publicly propitiates the nats (the spirits of Burmese animism)…" (p.51) をば，「公然とビルマのナッツ（聖霊を信仰する行者）に近づき……」と訳したり，Nan-Chao を「南朝」と訳したりするようではいただけない。また，原著者の幼稚なミス（たとえばp.50の年号 "1957" は，明らかに "1956" のまちがいだ）は，日本訳で当然訂正されてしかるべきであったが，訂正されていない。

一般に，東南アジア関係書の日本訳に，まともなものは少ないが，本書の訳がその従来の傾向を是正するに至らなかったことは，いくえにも残念なことだ。

（矢野暢）

Usha, Mahajani: The Role of Indian Minorities in Burma and Malaya. The Institute of Pacific Relations. 1960. *pp.344*

東南アジア諸国では，国民の大多数を構成する土着人の外に，かなりの数の外国人のいることは周知の通りである。就中華僑勢力が極めて強く，東南アジア華僑に就ての研究もアメリカのスキンナー（G.W. Skinner），英国のフリードマン（M. Freedman）等によって鋭意進められている。華僑に次いで力のあるのは印度人である。殊にビルマでは印度人の方が華僑を数的にも凌駕しているのである。しかるに東南アジアにおける印度人，いわゆる印僑の研究書はそれ程多くはない。その意味に於て少壮の女流印度人学者ウシャ・マハージャニ女史による，ビルマ及びマラヤに於ける印度人マイノリティの役割の研究が公刊されたことはまことに喜ばしいことである。

印度とビルマとは歴史的にも深い関係があるが，1852までの印度人は極めて少数であった。印度人人口が急激に増加するのは1852からでイラワジ・デルタが東印度商会に併合せられてからである。その後逐年増加して1931には100万余であるという。印度人は各種の職業に従事する外に印度教徒，イスラム教徒，キリスト教徒，仏教徒，シーク教徒があって複雑である。しかしこの書物はそのような点には興味を示さず，ビルマ人口の大多数を構成するビルマ人ナショナリズムと印度人の関係を主として取扱っている。

マラヤにおける印度人人口は1957年の統計では70余万であるが，比率の上から言うとビルマにおける印度人比率よりも高い。その3/5はゴム園労働者であるが，都市住民もかなり多い。印度人の中でもタミール人，テルグ人など南印出身者が多く，又その宗教的背景もさまざまで，華僑ほどの団結を示していない。ここでも著者は印度人社会の文化的側面にはそれ程の興味を示さず，ナショナリズムとの関係に関心の中心をおいている。

その意味で評者などには面白いことばかりは書いてない訳であるが，それは専門の相異によることであって著者の関知しないことである。しかし戦後の政治事情を知るためにはもちろん，民族研究上にも重要な参

考文献がある。引用文献も豊富であり，かつ現地において多数の人々と面接し，充実した記述ぶりである。

項目は(1)戦前のビルマにおける印度人社会の解剖，(2)ビルマ・ナショナリズムと印度人マイノリティ，(3)ビルマにおける印度人労働と移住，(4)マラヤにおける印度人社会の解剖，(5)日本のビルマ及びマラヤ占領，(6)戦後ビルマにおける印度人，(7)戦後マラヤにおける印度人問題，(8)戦後マラヤにおける少数民ナショナリズムの三角関係などの諸章である。

著者は1933プーナに生れ，1952ラジプタナ大学でB.A.，1954マサチュセットのスミス大学でM.A. 1957ジョンズホプキンス大学でPh. Dを得た人でInternational Relationsを専門としている。

（棚瀬襄爾）

Tein: Phei Myin「a-sei-ga neiwun: the' te bama」Rangoon. 1960. 3vols., *pp. 1192*

現代ビルマ語の表現形式を調べるために，最近，数冊の新刊本に目を通したが，その中で最も印象に残ったのが，ここでとりあげるテインペーミンの「日出づるビルマ」である。この本は，雑誌「ミャワディー」に，四年間に亘って連載された長編小説を単行本として，まとめたものである。

主人公タキン・ティントゥンが，ラングーン大学の学生であった1938年から，この小説は書き始められている。この年は，ビルマにとって，誠に多難な年であった。第一の紛争は7月に発生し，その後各地に拡がったインド人イスラム教徒とビルマ人仏教徒との間の宗教的対立であり，第二は，11月に勃発したイェナンジャウンの油田労働者のストと，それに呼応した農民のデモ，そして第三は，それらに続くラングーン大学生の反政府ストである。ストに参加した学生タキン・アウンジョーが，警官に撲殺された事から，ビルマの全産業がゼネストを敢行，遂に反政府運動から，反英独立運動にまで発展した。翌39年，バモー内閣は，全責任をとって辞職，ウー・プ内閣，ウー・ソー内閣，ポートウン内閣と次々に登場した新内閣も，ビルマ国民の排英独立運動の大波を，喰止める事は，もはや，不可能だった。1942年，日本軍は，アウンサン将軍を司令官とするビルマ独立軍と共に，タイから，ビルマへ進撃，6月，ビルマ全土が日本の軍政下に入った。排英独立を念願としたビルマ国民は，日本軍を歓迎したが，その本質が帝国主義である事に気がつくと，真の独立を求めて，抗日運動を開始するようになった。主人公タキン・ティントゥンが，抗日ゲリラとして，地下活動に入るところで，この小説は終っている。

全体を概観して感じる事は，この本が，著者の単なる創作ではなく，英国の植民地時代から第二次世界大戦に至るまでの，ビルマの政治的変動を，著者の体験を通して描いた，一種の型破りな「現代政治史」だという事である。現代ビルマ史に関する研究や，ウー・ヌ，ウー・バウー等政治家の自叙伝は，今迄にも，幾つか公表されているけれども，市民生活の一般的描写を通して，その背後を流れる歴史の動きを，これ程見事に，いきいきと描いた本は，恐らく，これが最初ではなかろうか？勿論，小説である以上，或る程度のフィクションは，止むを得ないが，主人公タキン・ティントゥンが，若き日の著者の化身である事は，ほぼ間違いなかろう。アウンサン将軍，ウー・ヌ，タキン・タントゥン，タキン・ソー，ネウィン将軍等，独立後の一流の政治家達の若き日の姿が，随所に見られるのも，本書を，一層興味深いものとしている。

原文の表現は，平易で，文章も，歯切れがよい。話し言葉を，ふんだんに用いた事も，この本を，一層身近かな感じのものとするのに成功している。尚，原題名は，「a-šei-ga neiwun: the' te bama」太陽が，東から昇るのは，自然の摂理であるように，ビルマに，独立の日が訪れるのもまた，当然であるというドーバーマー・アシーアヨンの歌の一節からとったものである。（大野徹）

Coedès, George: Les Peuples de la Péninsule Indochinoise, Histoire -Civilisations. Dunod, Paris. 1962. *pp. 228.*

インドシナを構成する複雑な民族文化を，歴史的な流れの上で把握しようとしたものである。著者は言うまでもなく斯界の権威の一人で，現在極東学院の名誉院長である。Les ètas hindouisès d'Indochine et d'Indonésie (1948) や Une période critique dans l'Asie du Sud-Est, Le XIIIe siècle (Bull. Soc. Etudes Indoch., 38, 1958) など著者自身の研究成果を更にその後の研究状況と照らしあわせて，改めて原